

## まどろみの詩学

—ブルーストとヴァレリーにおける夢

塚本昌則

目覚めながら、夢みることは可能なのだろうか。ブルーストの夢への関心の根底には、この疑問があるように思われる。『失われた時を求めて』には、眠りと夢に関する言及が数多くあるが、夢をそれ自体において研究するというより、どうすれば覚醒した意識を保つたまま、夢の働きを解き放つことができるのかという問いにこだわっているようにみえるのだ。そのこだわりは、しばしば夢が覚醒時の意識と混ざりあうまどろみの状態の記述となつてあらわれている。

『失われた時』の語り手が目指している芸術は、意識が半ば覚醒しながら、眠りの効果にひたっている、このまどろみと深い関係を結んでいる。その芸術は、現実の物質的側面や偶然の要素に作用されず、素材がどのようなものであれ、読者、観客に「別な目を持つこと、一人の他人、いや百人の他人の目で宇

宙を眺めること」(RTP, III, 762)を可能にするような芸術である。出来事を物語ることではなく、出来事に注ぐ眼差しを語ること、それもすみずみまで意志の力で制御された眼差しではなく、受動的でありながら対象の構築に参加しているような眼差しを創りだすことが問題となっているのだ。語り手はその眼差しを、見つめようとする意志と見つめられる対象の生成が切り離しがたく結びついているまどろみにひたつた人の眼差しのうちに求めている。覚醒したまま夢みることのできるこの眼差しを自在に自分のものとしてできるなら、「現実の純粹に精神的な性格」(RTP, IV, 493)を明らかにできるかもしれない。現実はその時、物質的な条件に左右される、偶然の産物ではなくなり、それを見つめる精神によつて作りだされる可塑的なものとなるだろう——そんな眼差しの創出を、読者に本當の意味で納得さ

せることがこの小説の根本的な動機であるようにみえる。

覚醒した意識は、眠りにひたされてこそ、「物を語る唯一の独創的な、唯一の革新的仕方」(RTP, III, 630-631)を得ることができると、語り手は確信している。しかし、ここにはひとつの背理がある。知性が働いている——覚醒した意識がある、ただそれだけで破壊されるものを、覚醒した意識の領域に、どうすれば引き入れることができるのか、というパラドックスである。

問題は、知性の光が当たるだけで破壊されてしまうようなある現実を知性の領域に引き入れるために、それを無意識の外へ引き出すことなのです、しかもその際、それを無意識の生命を保存し、それを損なわないようにし、できるかぎりそれを衰弱させないように努めることです。この救出作業に成功するためには、精神のありとあらゆる力、いや肉体のありとあらゆる力を注ぎ込んで決して足りないほどです。まだ眠っていないながら、自分の眠りを知性によって観察し、しかも知性の介入が目覚めを引き起こさないようにしたいと、そう思っている人に必要な、慎重で、従順で、大胆な努力といささか似ています<sup>2</sup>。

目覚めたまま夢を見ることは可能なのかという問いへのブルーストの取り組みを、ここではヴァレリーの夢研究と比較する

ことで考えてみたい。ヴァレリーの夢研究は、ブルーストと何らかの相互テクスト性のうちに展開されたものではなく、ブルーストが夢について考えていた道筋をそのままなぞるものではない。ただ、二人の作家はフロイトの理論を同じように退けながら夢について考えていて、その考察には不思議に共鳴する部分がある<sup>3</sup>。とりわけヴァレリーの中心的な課題は、覚醒した意識を保ったまま夢を構築することは可能か、そのようにして人工的に作りだされた夢にどれだけの価値があるのか、というものであり、ブルーストの夢に関する考察と深く通じている部分がある。

覚醒した意識と睡眠下の意識がまざりあうまどろみをめぐって、二人の問題意識はさまざまな視点で交錯している。ここではとりわけ夢における時間のあり方、さらに夢みる身体のある方に注目し、覚醒時のさなかの夢がどのようにして可能となる<sup>4</sup>と二人の作家が考えていたのかを検討してみたい。

## I 夢の時間

### 夢の時間、覚醒の時間

「(夢)が私を魅惑したのは、おそらくまた(時)に対して行うすばらしい作用のためであったのだろう」(RTP, IV, 60)——この文章だけでなく、『失われた時』の語り手は、夢

が時間におよぼす作用を繰り返し称揚している。それはいったいどのような時間なのだろうか。

語り手が強調するのは、夢がはるか彼方に追いやられた遠い時代の記憶を、すぐ手近なところにあるかのように感じさせるということである。そこでは、これまで過ごしてきた時間が、年代順に整理されて並んでいるわけではない。魔法の椅子で移動するように、永遠に過ぎ去った幼い頃に舞いもどったり、時には文明の幾世紀をも横断したりすることが、夢の時間では自在におこなわれる。「眠っている人間は自分のまわりに、時間の糸、歳月とさまざまな世界の秩序を、ぐるりとまきつけている」(RTP, I, 5)。目覚めると、自分が占めている地上の場所、時間軸上の位置に固定されてしまうが、眠りはその糸をたちきり、さまざまな時間と場所へひとを運んでゆくというのである。「私たちをとりまいている事物の不動性」(RTP, I, 6)を打ちやぶり、日常的な時間の観念から解放してくれるというのが、夢の時間をもつ第一の特性である。

同時に、夢が持続の感覚を変えてしまうことも、語り手の興味を引いている。どれほどの時間、眠り、夢をみていたのかという持続に対する感覚は、目覚めている時に感じる持続の感覚とは異なっている。「眠っている人にとって流れる時間は、目覚めている人の生活が遂行される時間とはまるでかけ離れている。ときにはその時間の流れがはるかに早く、十五分も一日のように思われることがある。だがときにはまたそれがはるかに

遅く、ちよつとひと眠りしたただけだと思つたのに、まる一日も眠ってしまうことさえあるのだ」(RTP, III, 370)。この持続感の変化は、語り手によれば、覚醒状態ではあじわうことができないものである。

覚醒時の生活はほとんどつねに同一であり、旅の幻滅もそこからくる。確かに夢は人生のもつとも粗悪な材料でできているように思われるが、それでもこの材料は加工され、こねられ、覚醒状態のような時間的制限にいつさい妨げられることがないために、おどろくべき高さにまでずんずん細かく伸びてゆき、ついに原形をとどめないまでになる。

(RTP, III, 628)

この文章は、語り手の夢にたいする関心が、夢の内容ではなく、覚醒時の生活とは本質的に異なつたりズム、異なつた時間感覚を生みだすことができる夢の機能的な側面にあることを示している。ほとんど変わらないようにみえる「覚醒時の生活」をいかに変化させるかが、語り手の目指す芸術にとって大きな意味をもつ。確かに夢は多くの場合、「人生のもつとも粗悪な材料でできて」いる。語り手は夢の全能を褒め讃えるどころか、その限界をつねに強調している。『見出された時』で夢を高く評価する時でさえ、語り手は夢を完全に信頼しているわけではない。夢は「遠い時代がすぐ手に届くところにある」という感動

シヨック、光明をあたえる」と述べ、その魅惑を語りながらも、次のように付けくわえずにはいられない。「ついに夢は私たちにこう信じこませる(ただし、それは間違いだであるけれども)、夢こそ(失われた時)を見出すひとつの方法なのだ、と」(RIP, IV, 491: 強調引用者)。

それでも語り手が夢を称揚するのは、それが覚醒時の意識に実現可能とは思われない、時間の流れの自在な組みかえを可能にし、たやすく制御できない時間感覚によって意識を翻弄するからだ。それは絶え間なく変形するイメージを通して、「事物の不動性」にとらわれている日常的な意識に、不思議な移動の能力と持続の可塑性をあたえてくれる。こうして語り手は、無意志的記憶がよみがえる瞬間に何が起こっているのかを考えるための手がかりを、まだ完全に目覚めてはおらず、眠りにひたされたまま夢の働きが残った状態で部屋の中を見まわすまどろみの時間に繰り返し求めるのである。

語り手のこのようなアプローチは、夢の問題が実際にみた夢を思い出し、そこに何かを読みとろうとするものではないことを示している。覚醒時のさなかに、夢の働きを現出させることがどうすれば可能になるのかというのが、語り手の夢への関心を支えている疑問なのだ。目覚め際のまどろみの時刻だけでなく、覚醒時のさなかに、人工的に夢の時間を再現することは可能なのだろうか。

## 生成状態としての夢

『失われた時』の語り手が何度も立ちもどるこの疑問は、そのままヴァレリーが夢研究で取り組んだ疑問でもある。いったん放棄した詩作に戻り、第一次世界大戦の喧噪のさなか、「フランス語の小さな墓碑銘」として書かれた『若きバルク』を準備しはじめた頃から、ヴァレリーは詩の生成と夢の形成の比較に何度も立ちもどっている。「詩がなければ、漠然としたものがなければ、片側だけのものがなければ、さまざまな夢がなければ——思考の領域はあまりにも狭く、行動はあまりに機械的なものとなり、事物は同じままにとどまるだろう」(C, IV, 503)<sup>4</sup>。目覚めたまま夢の時間のなかに歩みいることは、ヴァレリーにとっても、思考のもつとも重要な課題だったのである。ブルーストの考察から少し離れ、基本となる道筋を簡単にたどることにしよう。

「テスト氏との一夜」の後、ヴァレリーは眠りに落ちた状態を覚醒した意識で探查しようとする散文詩に取り組んでいる。『アガート』と呼ばれるこの作品は、一八九八年から一九〇一年頃まで書かれ、結局未完のまま放棄されたが、この『アガート』の草稿、さらに一九〇〇年頃からの『カイエ』で、ヴァレリーは夢研究を本格化させ、一九四五年の死にいたるまで、眠りと夢に関する数多くの考察を主に『カイエ』に断章の形で記すことになる。その研究全体を貫く視点は、通常ひとが夢とい

う言葉で何を言い表そうとしているかという言葉そのものへの問いかけである。ヴァレリーは夢という言葉が過去形でしか使われないこと、覚醒した現在の出来事としてその現象をすみずみまで見渡すことができないことに注目する。夢と呼ばれているものは、目覚めたときにわれわれが夢として見出す記憶である。目覚めている最中に、この記憶と比べられるような現象が起きることはほほえない。ヴァレリーはこの記憶が、断片的で、不確かなものであり、思い出せる部分についてもゆがめられているという感触が残ることが、夢に関する考察で決定的な重要性をもっていると主張する。

夢に関する第一の問題は次の問題である。目覚めたとき、自分の夢として見出すもの、われわれが自分のうちに見出す思い出は、はたして夢を見ている間にわれわれが感じた、見たり、等々したものと同じ表象なのだろうか？ われわれはおよそ検証不可能なあらゆるものについての思い出をひねくりまわしているにすぎないのだ——ちょうど突如として視界を横切つて消えた鳥が何という種類の鳥であったかを知りたいと思うようなものだ。そんなふうにしてあとから見出したものにどれほどの価値があるのか？——価値不定である。われわれが（夢）と呼ぶものは、したがってある現実の表象についてのあり得るべき形象ということだ。(G, XI, 80-81; C2, 122)

夢の記憶の不確かさは、その逆の夢の記憶の鮮明さとならんで、この現象について考えてきた人びとの注目をつねに集めてきた。フロイトも『夢解釈』に「目が覚めると夢を忘れてしまうのはなぜか」という一節を設け、夢がきわめて忘れやすいものであること、さらに記憶によって再生された夢もどこまで信用できるか疑わしいものであることに言及している。ただしフロイトにとつて、記憶の不確かさは、彼の夢理論の根幹をゆるがすような現象ではない。夢の記憶がゆがめられ、偽造され、忘却されるのは、夢思想が夢検閲のためにまさしく夢が作られる瞬間に受けている加工作用の働きが、目覚めてからも働きつづけるためである（目覚めにおける記憶の歪曲を、フロイトは「二次加工」と名づけている）。フロイトは、自らの夢理論のなかで、この現象に整合性のある説明をあたえているのである。それに対して、ヴァレリーは覚醒時における夢の不在にこだわって、夢に関する考察を進めた。夢は過去形でしか語れない。そこには、覚醒した意識がすみずみまで見渡すことのできるような明確な対象が欠けている。夢について考えることは、覚醒時の生活にはそのままの形では存在せず、変形され、たやすく消滅する現象を考へることだとヴァレリーは主張する。「夢に関してわれわれが知ろうと望み得ることは何か——夢について——夢によつて——われわれにできることは何か？ こうした本質的な問いを提起してみると、それらの問題があくまで有

効であるのは、夢という現象そのものの本質的な不在性、われ

われがそれを不在の形においてしか考察できないという事実があるからだということがよく分かる。／夢はそうした不在、観察者との非＝共存性によって定義される」(G, XIII, 791; G2, 142-143)。

眠っている間の意識のあり方と、覚醒時の意識のあり方は、根本的に相容れない——ヴァレリーが覚醒時のさなかにある夢にたどりつくのは、逆説的にこの疑問を深めることによってである。問題は、夢の側ではなく、あるがままの夢の姿をとらえることのできない覚醒時の認識の側にある。この意識のあり方が、ある一定の特性にしたがっているために、あるがままの夢の形成に身をゆだねることができないのだ。したがって、この覚醒時の意識の特性を究明できれば、その特性を反転させることによって夢の性質をかいま見ることができるとはならないか。「夢を考えるために第一に見出すべきことが覚醒時とその諸特性であることは明らかである」(G, XVII, 770; G2, 163)。

夢に関する良い理論は、覚醒時に関する良い理論の上にか企てられない——こうして覚醒時に関する理論のおかげで、覚醒時を構成する諸条件を組織的に変質させてゆくことによって、「夢とは何か」というこの虚しい探究においても、望むべき興味深い何かを、つまりどのような点で夢は覚醒時と根源的に異なるのかというその大もと

を——いくばくなくなり——再構築することができる。(G, XVI, 674)

では、夢の本質を損なわずにはいられない、目覚めた意識の特性とは何か。ここではヴァレリーのもっとも基本的な考え方をだけを取りあげることにしよう。ヴァレリーによれば、目覚めた意識を特徴づけているのは、「再び＝見出す」という機能である。

覚醒時とは何か？

それは再び＝見出すということだ。

この「再び」というのが重要な記号である。

(G, XXI, 669; G2, 181)

もし心像が変貌するまま、その展開と組合せのなかに、現在の感覚に戻らないままどこまでも入りこんでゆけば、それはもはや心像ではなくなり、夢のように見るものをまきこむ現象となるだろう。ここでブルーストの小説に戻り、『失われた時』の冒頭場面を考えてみよう。語り手は暗闇で目覚めたまま、それまで生きてきたさまざまな時間のなすがままになり、自分がそれまで過こしてきた部屋のどこかひとつのなかにいるものと感じている。そのまどろみの変転のなすがままになっていけば、意識は夢に変質してゆくだろう。自分が現在どこにいて、どの

ような年齢や状況のなかにいるのかという認識に戻る事がなければ、夢のとめない生成運動にまきこまれてしまうだけである。現在に再びもどり、それ以前の思念が精神という場で展開されていた夢や幻想にすぎないとわかる地点に立たなければ、覚醒時の思考は始まらない。同時にこの回帰は、それ以前に展開された夢の思考を抑圧することになる。戻ることによって、時間の糸がほぐれていない秩序だった思考が可能となるが、戻ってしまえば、さまざまな時間のなかに覚醒時とは違う持続感をもつて入ってゆくような思考形式は終わってしまう。夢の時間は、この視点から見れば、覚醒した人間が通常の平衡状態に戻るまでの時間ということになる。

ヴァレリーはこの時間が、実際には眠りやまどろみだけにとどまらず、覚醒時の生活のすみずみにまで浸透していると指摘する。「生成状態においては、すべてが夢である」(C, VIII, 519; C2, 106)。目覚めている時にも、「生成状態」にまきこまれ、夢に近い状態に陥ることはまれではない。ヴァレリーは一瞬ごとに、われわれは夢をみているとさえいう。それが眠りのなかの夢と異なっているのは、自分の置かれている場所と時間へのすばやい回帰が起こるという点である。

一瞬ごとに、われわれは夢を見ている。というよりむしろ、どんなわずかな一瞥からでも——どんなわずかな予期されない感覚からでも、夢は形成されるのだ。ただちに一

種の作り事がわれわれのなかを駆けめぐるのが、それはあまりにすばやく、あまりに虚しいものであるために、その作り事は生まれるやいなや、まるでかすかな火矢のように——水面を走る波のように——ただちに消滅する。それが通過する際、錯綜体をなしているような火薬庫に火を放たない限りは(……)。(C, XXII, 439)

問題は、どのようにして夢を作り出すかということではなく、いつでも産出されている夢をどうすれば維持することができるかということなのだ。この視点から、覚醒時のさなかに夢の時間を再現する方法を、ヴァレリーはさまざまな角度から検討している。その問いかけは、『失われた時』とも無縁ではない。ここではそのなかでも「期待／不意打ち」という現象に関する考察を見ることにしよう。

#### 期待／不意打ち——覚醒時のなかの夢

われわれは一瞬ごとに夢を見ていが、覚醒時にはその状態から通常の平衡状態への回帰がすみやかになされる。いつまでも夢におぼれているわけにはいかない。ただ、そうした警戒がほどこけ、すぐに平衡状態を見出すことができない状況がいくつかあるとヴァレリーは考えている。

そのなかでも、ブルーストとの関係でとりわけ重要なのは、

「期待／不意打ち」という現象である。『失われた時』は、ことさら指摘するまでもなく、不意を打たれる場面に満たされている。紅茶に浸したマドレーヌ、ヴァイオリン・ソナタの一楽節、シヨトブーツを脱ぐこと、敷石につまづくこと等々、ある感覚的な出来事によって、忘れていた過去がよみがえってくる。『失われた時』の人物たちは不意を打たれ、そこから日常とは異なった時間の流れに思いをはせる。感覚に対して深い印象を刻む何か、ただし、その印象がどこから来るのかすぐにはわからないような何かに不意を打たれることがこの小説ではつねに問題となっている。

ヴァレリーによれば、予想外の出来事に不意を打たれたとき、ひとは眠りの効果にひたされた現実を見る。「不意を打たれた人間は一瞬夢をみる。一瞬のあいだ、彼は夢の性質を帯びるのである。彼は想像をめぐらせる——まず最初に頭に浮かんだ理由について。しかし、結局はこちら側の世界の現実に思いあたる。緩衝作用が素早く働いたのだ」(G, V, 424; C2, 78)。

なぜ不意打ちは、目覚めた人に夢の効果をもたらずのか。それは目覚めた人が、自分の身にどのようなことが起こり得るのかを予期しながら生きているためだとヴァレリーは考える。「人間はつねに何ものかを予期している。そうでなければ彼は——存在しないだろう。また、それゆえにこそ、彼はつねに不意を打たれる可能性があるのだ」(G, X, 269; C1, 1320)。例えば、目の前にあるテーブルが一瞬後に深淵に呑みこまれるか

もしれないと恐れている、何もすることができないだろう。一瞬ごとに世界が劇的に変化することは無いという予想のなかでしか、覚醒した明晰な思考は十分に機能することができない。現在の状況が基本的に持続すると予測し、その範囲内で行動することが、覚醒時の意識の基本的なあり方なのだ。このように予期しながら行動し、しかも結局は「すべてを予期することができない」(G, III, 899; C1, 1268) ということが、不意打ちを避けられないものにする。

突飛なものが荒々しいものや唐突なものと同様の効果を生むのは、——それぞれの人にとっての可能な観念が、それぞれの時期に、彼自身にはその境界を知覚できない領域を形成しているか、——あるいは、彼がこの境界を彼の思考の絶対的な可能性の境界と混同しているからである。

彼はいつも、彼自身でただちに想像できるものの輪郭を、彼がいずれにせよ思いつくり知覚するなりすることがあるかもしれないものの輪郭と、取り違えている。

それゆえ、目覚めている人はいつも夢を見ており、またいつでも目覚めた状態になり得るだろう。

予測されず、予測不可能なことは、この夢からの目覚め、この輪郭の変化を作りだすのだ。(G, V, 608)

覚醒した意識は、予想可能な範囲のなかでしか機能できない

というのである。目覚めた人は知らず知らずのうちに、ある限られた可能性の領域に自らの思考を閉じこめ、その領域を「絶対的な可能性の境界」と取り違えている。目覚めている人の知的操作は、彼自身が意識しないまま予期している事態の内側でなされているからこそ可能なだし、逆に言えば、覚醒時の生活は、予想外のものがない、「ほとんどつねに同一」である限りにおいて成立している生活である。そのためにこそ、本質的な差異を帯びた出来事は、覚醒時の生活から排除されることになる。日常的な時間の過ごし方が可能であり、その中で高度な知的操作を営むことができるのは、すべてが予想の範囲内にとどまっているために他ならない。

ところが、「すべての不意打ちは、先立つ状態を夢に変える」(G, VI, 335)。啞然とするような出来事に巻きこまれると、思考の見えない限界となっていたその領域が突き破られ、次の展開の予測がつかなくなる。すると、目覚めている人も、夢の中にいるかのように、先行きが読めない変転に巻きこまれることになる。「あらゆる不意打ちは、それ以前にあったものに遡って働きかけ、夢あるいはほとんど夢に変えてしまう。その時われわれは、眼を覚まし、夢との境目に立って呆然として自分の夢を思い出している人に似ている」(G, V, 602; CI, 1289)。日常生活を「再び見出す」までのあいだ、夢の時間が解き放たれることになるのだ。

ブルーストに戻る前に、この期待／不意打ちシステムが、夢

の時間に関する洞察をふくんでいることを確認しておこう。ヴァレリーにとつて、夢の時間とは、覚醒時の生活の平衡状態に戻る前に展開される時間である。「すべての夢はある時間内しか生産されないし、またそうした一定の時間内でしか生産され得ないものである——そしてその時間はひとつの知覚に意識が戻つてくるのに必要な最小時間よりさらに短い時間である」(G, XXII, 165; G2, 181)。通常期待される現実のあり方に亀裂が走ることによって夢が作動しはじめてから、身のまわりで何が起こっているかが理解できる状態に戻るまでの時間こそ、夢の時間だというのである。自然に見える時間の流れはつねに中断され、そこから逸脱した、夢の時間が始まり得る。逸脱からいつもの平衡状態に戻るまでのごく短い時間、どれほど覚醒しているつもりでも、そこに夢の価値が解き放たれている、とヴァレリーは考えている。

この見方と比べると、ブルーストが『失われた時』で描く日常のなかの夢には、大きな特徴があることがわかる。ブルーストにとつて、覚醒のさなかに出現する夢とは、それまで不在だったものがありありと出現させる力を備えた何かなのである。ヴァレリーが不意打ちを、そこから幻想の世界へと入ることを可能とする敷居とみなしているのに対し、ブルーストは不意打ちを、記憶の奥底に埋もれていた過去がよみがえるような、ある特別な時間への扉とみなしている。かつて感じていたままの、生き生きとした現実感が失われ、すでに滅び去った時間が、結

局は自分の現実を本当の意味で構成していた——そう気づかせるものが、『失われた時』において、不意打ちによって現れる夢ではないだろうか。夢の中で、すでに死んでしまったアルペルチーナのことを考え、夢そのものがさめてだいぶたつてからも語り手がそのことを考えている場面にそのことが典型的にあらわれている。

一日じゅう、私はアルペルチーナと言葉をかわしつづける。彼女を問いつめ、彼女を許し、生前の彼女にいつも言いたいと思つていて忘れてしまったことの埋め合わせをする。そして不意に私はこう考えて、ぎよつとするのだった、記憶によって引きだされてきたこの人物、こうしたすべての言葉の向けられた対象である彼女には、もはやいかなる現実も対応していないのだ、その顔のさまざまな部分もすでに崩壊してしまつた、これに一個の人格という統一性を与えていたのは、生きる意欲という絶え間ない圧力のみであつたけれど、それも今では消滅してしまつたのだ。と。(RTP, IV, 121)

不在のもの、亡くなった人をまるで生きているかのように感じさせること——これが『失われた時』の語り手が夢に認めている働きである。不意打ちによつて生じた夢は、精神が平衡状態を取り戻すことによつてはかなく消えてゆくものと、ヴァレ

リーはみなしていた。それに対し、ブルーストにとつて、覚醒時のさなかに出現した夢は、むしろそのまま居座ろうとする強い力をもつたものである。『失われた時』の語り手は、夢をどのような時間にも自在に行くことを可能とする、強力な視覚装置のようなものとみなしている。その装置のなかにいると、語り手は知らないうちに現実とは別の時間に移行している。引用した場面では、語り手はアルペルチーナが生きていた時間のなかにいる。そして再び現在に戻ると、それが現実ではないこと、いま自分が置かれている日常生活においては不可能な時間であることを理解して、語り手はがく然とする。

ブルーストの小説においては、不意打ちが幾層もの厚みをもつものとして描かれているという言い方ができるかもしれない。繰り返される不意打ちを通して、夢と現実を行き来するなかで、現実そのものへの見方が変わつてゆくさまが描かれているのだ。「心の間歇」で、最初の不意打ちは、シオートブーツを脱ごうとする感覚である。語り手はその動作が初めてではないことに気づき、自分を気づかつて靴を脱がせようとしてくれた祖母を思い出す。それに続いて、もうひとつの不意打ちが語り手を襲う。語り手はシオートブーツを通して一年前になつた祖母が圧倒的な存在感をもつてよみがえるのを感じるのだが、同時に祖母がこの世にもはや存在しないことを強烈に感じるのだ。最初の不意打ちは、語り手のなかで祖母が死んでいないことを納得させるものだが、二つめの不意打ちは、圧倒的な存在感を

もったその人がこの世にもはやいないという発見である。覚醒した意識は祖母が死んでいることを納得しようとするが、存在／不在の二重の意識は容易には解消されない。「祖母は私のなかで生きつづけているのに、どこにもいない、そんな生存と虚無が交錯する実に不思議な矛盾」(RTP, III, 156)が語り手を苦しめる。夢の時間では祖母が生きていることが現実だが、覚醒した時間においては、その祖母がどこにもいないことが現実である。覚醒時のさなかの夢は、そうした多元的な現実のあり方を気づかせるものとして描かれているのだ。

いずれにせよ、覚醒時を夢に変える不意打ちを、「人生の本当の瞬間を再創造する力のない思考」(RTP, III, 157)をふるいたたせ、日常や夢を超えた深い覚醒の瞬間に到達するためのプロセスとブルーストがみなしていることは確実である。ヴァレリーは不意打ちによって開かれる夢の時間が、安定した世界観に戻ろうとする回帰の運動によって終わると考えていた。それに対して、ブルーストは、不意打ちによって開かれる覚醒のさなかの夢を、現実の物質的な推移、偶然による変転を超えて、自分たちにとって本当の現実と呼べるものを再構築することへの呼びかけと捉えている。「私たちが本当を知っているのは、思考によって再創造することを余儀なくされたもののみなのだ。そして毎日の生活は、そういうものを私たちから隠してしまう……」(RTP, III, 166)。覚醒時のさなかの夢は、さらに覚醒するように、自分たちが精神によって再創造せざるを得ない現実

に目覚めるようにと私たちを誘う。語り手が、この後で眠りに落ちてゆく意識を描いている箇所注目してみよう。この箇所は、祖母が存在するということも真実だし、もはや存在しないということも真実であることを認めながら、自分が現実と思いついでいるものとは異なった新たな精神的現実世界にたどり着こうとする探究こそが、この小説で問題となっていることを明らかにしている。

私がついに眠りこみ、外部の物に対して目のとざされるこのいっそう真実な時間に到達すると、たちまち眠りの世界が(知性も意志も、その世界の入口で一時的に麻痺してしまい、きびしい真の印象から私を奪い返すことができなくなってしまうのだが)、からの奥深くで神秘的に照らしだされた内臓の半透明になった部分に、祖母の生存と無という二つのものの苦痛に満ちた総合を反映し、それを屈折させるのだった。眠りの世界、そこでは内的な認識が器官の混乱に依存しており、心像や呼吸のリズムを速めている。なぜなら、同じ量の驚き、悲しみ、後悔も、もしこんなふうに静脈に注射されると、百倍の力で作用するからだ。私たちが、地下世界の動脈を踏破すべく、うねうねと六つも曲がって流れる腹中の(忘却の河)のように、自分自身の血液の黒い波の上に乗って船出するやいなや、おごそかな大きな人間の顔があらわれ、私たちに近づき、涙にくれる

私たちを残して去ってゆく。私は薄暗いポーチの下にさしかかるたびに、すぐ祖母の顔を探したけれども無駄だった。しかしながら、私には彼女のまだ存在していることが分かっていた。ただしその生命は衰えて、回想のなかのように弱々しいものではあつたけれども。(RTP, III, 157)

覚醒時のただ中に出現した不在の祖母は、語り手の不意を襲うだけでなく、眠りのなかまで語り手を追いかけて、同じ悲しみ、後悔を、百倍の力でかきたてる——このように、不意を打たれた不在の祖母が圧倒的な存在感をもってその場にいることを感じた語り手は、感情のなかではまったく時間が流れていないこと、にもかかわらず現実には時間がながれていることを同時に感じ取る。その矛盾は、いったいどうすれば解消されるのか。『失われた時』では、感情のなかでいつまでも流れない時間と、その感情を引き起こした人物の消滅がもたらす悲哀にひたる時間という、不在／存在の交錯こそが、夢と覚醒の交錯の果てにみえてくるより根源的な運動である。この不在と存在の交錯がもたらす感情こそ、まどろみの詩学の中核に位置する感情ではないだろうか。

## II 夢と身体

### 参照軸としての身体

夢の時間は、確かに目覚めている間にも存在する。問題は、その時間がはかなく消えてゆくことである。なぜ目覚めているとき、夢の時間は長つづきしないのだろうか。なぜそれは「間歇」的な出来事にとどまるのか。その理由を、ヴァレリーにらって身体という視点から考えてみよう。

ヴァレリーは覚醒時にすばやい回帰が起こる理由を、身体が存在に求めている。ヴァレリーによれば、身体は覚醒時において、恒常的な参照物として機能している。覚醒時において意識するというのは、一瞬ごとに変化することがない自己の身体を軸として、その感覚を外部の事象とつなげたり、その感覚を基盤として内的思考を分類することである。

覚醒時においては、『わが身体』と呼ばれる対象があつて、それが自分との関係ですべての表象を個別化する。それは一種の恒常的な参照物である。夢においてはその身体が恒常性をもたない。身体概念があるだけなのだ。

(C; IV, 497)

身体は、〈精神〉だけではどうすることもできないものの存

在を教えると同時に、〈精神〉の中で起こることを相対化し、相互に関連づけることを可能とする。身体感覚というこの「きわめて変わりやすい感覚はわれわれの意識の一部をなしている」だけでなく、「しばしばわれわれの意識全体を構成」している（G, VII, 554; G1, 1124）。覚醒時の思考は、このように覚醒時の身体のある方によって制限されている。身体が不変の参照体系として機能するために、思考は夢がかいま見せてくれるような無制限の広がりをもつことができない。「目覚めている人の身体は、それ自体、切実な、差し迫った現前として、彼自身のある種の関係もしくは調整にもっとも深く関わっている瞑想にまで支配を及ぼしている」（G, IV, 497; G2, 37）。

これに対して、眠りの到来とともに、身体は言ってみれば液化化し、認識の調節機能を果たせなくなる。「夢において身体は恒常性をもたない。身体概念があるだけなのだ」（G, IV, 497）。概念となった身体は、もはや覚醒時のような認識のあり方を支えられない。「もし私の片脚が眠ってしまったえば、脚が私の体重と地面とのあいだで受ける圧力に私はもはや答えない。そして片側の筋肉に刺激を受けなくなることによって私はぐらつき、大地がへこんだと思う」（G, IV, 14）。身体が、睡眠下におけるように液化化し、参照軸として機能しなくなったとしたら、思考はどのようなものとなるのだろうか。それが一本の樹のように成長していったり、一匹の動物として草原を信じられない速度で駆けめぐるとき、それでも思考は覚醒時と同じ形を

しているだろうか。

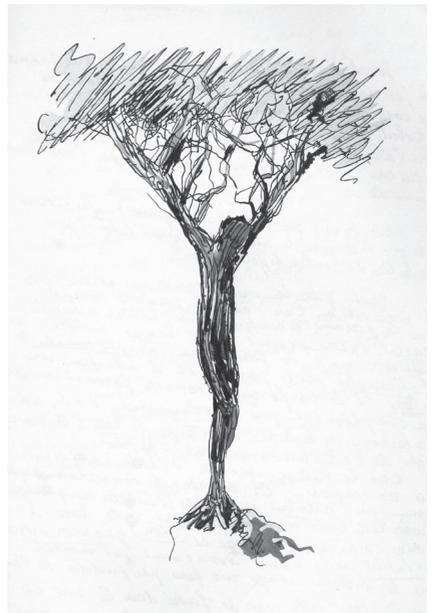
### 身体の変容

『失われた時』には、眠りに落ちてもはや人ではなくなったさまざまな身体のある方への描写を見出すことができる。典型的な例として、眠りに落ちたアルベルチーヌの描写を見てみよう。「目を閉じ意識を失ってゆくにつれて、アルベルチーヌは、彼女を知った最初の日から私に幻滅を味わわせたあのさまざまな人間的性格を、ひとつずつ脱ぎ捨てたのである。もはや彼女は草や木の無意識の生命、私の生命とはいっそうかけ離れた、異様な、にもかかわらずいっそう私のものとなった生命によって生きていくにすぎない」（RTP, III, 578）。眠りのなかに落ちてゆくにしたがつて、ひとはこのように人間的性格を失い、「草や木の無意識の生命」に近づいてゆく。「時間の糸、歳月とさまざまな世界の秩序」は、眠っている人のまわりでは解きほぐれているのだ。目覚めれば、その秩序は順番通り、収まるべき場所に収まるはずだが、深い眠りにとらわれている状態ではそれらの時間の糸が切れることもある。「その時精神は、眠りこんだ場所がどこだったかも忘れてしまい、こうして私が真夜中に目覚めるとき、自分のいるところが分からないので、最初は自分がだれなのかもあやしい始末である。私はただ、動物の内部で震えているような存在感覚を最も単純な形で備えているに

すぎず、穴居人以上に無一物である」(RTP, I, 5)。

ヴァレリーもまた、この「動物の内部で震えているような存在感覚」を基盤に、ひとが夢の中でさまざまな存在に変容するさまを描いている。文学を古い時代から支えてきた変身<sup>トランス</sup>は、何より身体感覚が日常的なあり方から解放され、「動物の内部で震えているような存在感覚」にまで変化することを基盤としている。「ドガ ダンス デッサン」の、踊り子として水中を漂う水母、大地に深く根を下ろせば下ろすほど、それだけ高く、葉という緑色の唇を空にむけて開くようになる『樹をめぐる対話』でのティチュルス。など、ヴァレリーは身体感覚の変容によって日常的な人間の形に回帰しなくなった存在を描きだす夢をさまざまな形で描いている。

ヴァレリーのこうした変身譚に比べると、ブルーストは一見、肉体が変容し、別の存在に変わってゆくような変身の感覚にあまり興味を寄せていないようにみえる。語り手が樹や鳥や水母に変身する場面はない。しかし、身体感覚の変容そのものは、実際にはさまざまな場所で語られている。語り手はサンザシを見るとき、心の底で花が開いてゆく動きを追い、それを真似てみようかと試みなかっただろうか。『ソドムとゴモラ』冒頭で、シャルシユスとジュピアンは、マルハナバチと蘭に変身しなかっただろうか。「同じひとりの人間を数分のあいだ観察していると、次々と、人間、鳥人間、または昆虫人間などにみえなくなる」(RTP, III, 8)。と語り手は記さずにはいられない。



Valéry, C, XXVII, 703

ここで眠りのなかのように人間を変身させるこの身体感覚の変化が、『失われた時』の語り手に対して、ある特別な形で作用することに気づかずにはいられない。日常の、起伏に乏しい時間から別の時間に移行するために、夢が示してくれるような思考のモードへの転換が必要であり、そのためには身体があり方が変わらなければならないという点までは、ブルーストとヴァレリーとの間に共通した認識がある。しかしその移行をめぐって、『失われた時』の語り手は独特の経験をする。ある謎のような感覚が身体に投げかけられることが、日常ともうひとつの眠りにひたされた生活との間の敷居として機能している

のである。マドレーヌ、シヨートブーツ、敷石、スプーン、ナ  
 ピンなどは、思考を別モードに変えるために身体になされる、  
 ある種の催眠状態に入るための合図、一種のクリックのような  
 ものである。それはヴァレリーのるように、堅固な参照体系とし  
 ての身体から、液化化した身体へと変化し、絶え間ない変身に  
 身を投じながら夢の変転に翻弄されるという道筋とは異なつて  
 いる。ブルーストの場合、感覚への問いかけによって、非常に  
 よく似たある出来事が、同じ物質をめぐって起こったという、  
 はっきりしない記憶が起動することが重要なのだ。さらに言え  
 ば、感覚への問いかけによって、物がそれを見つめるものにと  
 って二つの時間に属するものとなり、それによって語り手の現  
 実に対する認識が変わってゆく点が重要である。つまり、身体  
 への問いかけはあくまでも変身の最初の段階であり、それに引  
 きつづいて物が硬さを失い、精神的なものに変容することによ  
 り、覚醒時のさなかの夢への移行がなされる、という形になつ  
 ているのである。

## 二つの現実

以上に見てきたように、ブルーストとヴァレリーの夢に関する  
 考察は、夢の中で実現される時間、その根底にある身体の変  
 化という点で、比較できる部分があった。しかし、その夢研究  
 がむかっている方向はかなり異質であると認めざるを得ない。

ヴァレリーの探究の核心には、意識があるというただそれだけ  
 で夢が破壊されるのに、それでも覚醒した意識によって夢を再  
 構築できるのか、という問題がある。それに対して、ブルース  
 トの場合、夢であろうと覚醒した生活であろうと、問題は現実  
 が物質的、感覚的で、偶然に左右されるものであることをやめ  
 ることである。ある芸術家からみて、現実はどうすれば精神的  
 なものとして再構築することができるのか、芸術によって、現  
 実の精神的性格を解放するにはどうすればいいのか、というこ  
 とが問題となつているのだ。プーレの言葉を借りれば、「ある  
 外的対象は、どのようにして、われわれ自身とおなじものとい  
 つていいほどわれわれ自身になじんだ、非物質的な、そして精  
 神が自由にそのなかに没入し、そのなかで動き、くつろぎ、と  
 けあうあの内的なものに変質するのか？」という疑問が重要  
 なのだ。ブルーストにとつて夢が大切な意味をもつのは、外的  
 対象が精神的対象に変質する、この不規則で、偶発的なプロセ  
 スに、睡眠下の精神のあり方が深く関わっているようにみえた  
 からに他ならない。

ブルーストにおいては、感覚への問いかけによって、身体が  
 二つの時間に入つてゆく。そのプロセスは、ヴァレリーにおけ  
 るように、一定の時間が経てば同じ平衡状態に戻ってくるよう  
 なものではない。『失われた時』は、小説家になるための条件  
 を追い求める物語であり、小説の冒頭部分から、年代記的に語  
 り得る物語からの逸脱はすでに始まっている。覚醒時のさなか

に現れる夢に似た状態を追求するとき、『失われた時』の語り手のなかでは何が問題となっているのだろうか。自分が現在だけでなく、別の時間においても、同じものをめぐって同じ感覚のうちに生きていたと感ぜるとき、そこで何が起こっているのか。「皿に当たるスプーンの音、不揃いな敷石、マドレーヌの味などを、現在の瞬間において感じると同時に、遠い過去の瞬間においても感じていた結果、私は過去を現在に食いこませることになり、自分のいるのが過去なのか現在なのかも判然としなくなっていた、ということだ。実を言うと、そのとき私のかでこの印象を味わっていた存在は、その印象の持っている昔と今とに共通するもの、超時間的なものなかでこれを味わっていた(……)」(RTP, IV, 450)。

ヴァレリーの場合、夢を通して、現在が確固としているように見えた秩序から逸脱し、生成状態のなかで変容しはじめる瞬間を捉えることが問題だった。ブルーストにおいては、そもそも現在という時間そのものから逸脱し、何が起こっても変わらないようなある本質的時間に到達することが問題となつている。ここでは現在への回帰は問題ではなく、物質が精神的なものとなる、ある理念的な世界に到達することが目指されているようにみえる。少なくとも、「二つのものの類似の奇跡が私を現在時から逃れさせる」(RTP, IV, 450)ことが必要とされている。逸脱＝回帰というヴァレリーの現在のモデルに対し、ブルーストの場合、感覚的に捉え得る対象(物理的対象)が、想

像力(精神的な力)によってすみずみまで再構築される状態に到達することが探究されている。

夢は時間のあり方の変容、身体のあるあり方の変容を通して、それが現実だと普通思っているものとは異なった世界を提示するという意味で『失われた時』の語り手を魅了した。ただし、語り手を完全に魅了することはできなかった。なぜなら、覚醒した意識をも満足させるような形でひとつの世界を構築する力が夢には欠けているからである。それは現在目にする世界とは別の世界が存在することをかいま見させてはくれるが、覚醒した意識が住まうことができるような強度をもった世界を構築してはくれない。夢の残す強烈な印象について述べながら、語り手は次のように語っている。「私は理解した、すべては精神のなかにあるのに、ただ大ざっぱな誤った知覚のみがすべてを対象のうちに置こうとすることを」(RTP, IV, 491)。どうすればすべてを対象のうちではなく、精神のなかに置くことができるのか。この問いは、現実というものの位置づけが、十九世紀小説のように、登場人物の外に存在するものと見なされていた時代から変化したことを示している。現実、極端に言えば、語り手が自らの作品によって作りだすべき世界として存在するのだ。『失われた時』の語り手は、われわれが現実と思ひこんでいるものも、普段は気がつかないだけで、夢のように精神によってすみずみまで構築されている、と断言してはばからない。覚醒時のさなかに夢が出現することは、きわめて稀な、偶然に

左右されることと思われていたのに、小説のこの段階に至ると、もはや覚醒時には夢にみだされていらない状態はないという、立場の反転が起こっている。このような反転はなぜ起こったのだろうか。

ここで、ヴァレリーをもう一度だけ参照することにしてしよう。ヴァレリーは現実には二つの種類があると指摘する。ひとつは対比コントラストによって定義される現実。「現実という概念は、対比コントラストによって初めて価値をもつようになる」(C. X. 227)。対比はしばしば、心的活動と、心的活動によっては変形不可能なものの存在(身体感覚、外部世界の知覚)とのあいだで感じられる。目が覚めたとき、現実そのものだった夢が、過ぎ去った夢となってしまうのは、それが精神の内部で展開されたものにすぎないと見なされるためである。この視点から見れば、夢のなかで感じられる現実感リアリティは、どれほど強烈なものであったとしても、ある特殊な条件においてそう思いこんでいたものにすぎない。夢の現実感リアリティは、ひとつが目覚め、参照体系として機能する身体感覚や、外部世界の知覚を取りもどしたとき、それらとの対比のなかではかなく消えてゆくことになる。それは眠りのあいだ、精神のなかで生みだされた幻想にすぎなくなる。

ヴァレリーが指摘するもうひとつの現実の定義は、意識それ自体がもっている現実性である。現実を特徴づける対比が、心的活動からは独立した要素が存在するという確信から来ているという点に着目してみよう。覚醒した意識は、その動かしがた

い要素を、通常外部世界の物の存在に認めている。ところが夢は、そのような動かしがたいものが、夢みるひとが振りほどくことのできない心的モチーフでもありうることを示している。ヴァレリーの観察によれば、欲望、苦痛、驚きなどの精神の反応は、それ自体でひとつの動かしがたい現実をつくる力をもっている。「夢はひとつの現実である。より正確に言えば、意識はひとつの現実である。なぜなら、意識は数多くの連続性のかに入っていくことができるからである」(C. VI. 50)。否定しがたい何らかの心的現実を前にするとき、われわれは全力でそれを否定し、そこから目覚めようとする。その目覚めが訪れるまでは、その心的現実が世界を覆いつくすことになる。ここでは現実リアリティは、対比によってではなく、否定する力の喪失によって定義されることになる。

このように現実の二つの定義を並べてみると、現実リアリティは純粹に精神的なものであるとブルーストがいうとき、その精神性は後者の、否定しがたい感触を基盤としてることが納得される。心的活動との対比で感じられる、外部世界の動かしがたさは、そこではあまり問題になっていない。ある強烈な動機によって、現実そのものが再構築されるような、現実世界に夢の効果をおよぼす途方もない形成力こそが問題なのだ。想像力を押しつぶす日常における現実から、想像力によってすみずみまで再構築された現実への移行を物語ること、これが『失われた時』のもっとも基本的な方向ではないだろうか。

ここで語られる世界の再構築は、物としての世界の創造ではない。眠りと夢の性質を帯びた眼差しによって、味気なかった世界に魔法の砂が撒きちらされ、それが異なった世界に見えるようになる——そのような世界への覗き窓の創出が問題となっている。そのためにこそ、語り手は夢を自らの語りのなかに取りいれようとするのだ。

## 結語

夢には、ある強烈な動機によって現実を作りなおし、現実そのものを再構築する力がある。それを睡眠下のはかない現象としてだけでなく、覚醒した意識においても作りだすためにはどうすればいいのか。精神によって再構築され、夢の効果がすみずみにまで浸透しているような現実世界は、どうすれば作り出すことができるのか。『失われた時を求めて』の語り手にとって、夢の問題は最終的にはこの疑問に帰着するのではないだろうか。

## 註

1 ブルースト『失われた時を求めて』（『失われた時』と省略）からの引用は、略号を用いてそのレフェランスを本文に記

す。翻訳は、鈴木道彦訳（集英社、全十三巻、一九九六一—二〇〇一年）を参照した。

— *La recherche du temps perdu*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 4 vol., 1987-1989. (RTP, I, II...)

2 ブルースト「『アナル』誌のアンケートへの回答」、『ブルースト評論選 II 芸術篇』所収、保莉瑞穂編、ちくま文庫、二〇〇二年、三七二—三七三頁。Proust, « Réponse à une enquête des *Annales* », *Contre Sainte-Beuve*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1971, p. 640-641.

3 ブルーストとヴァレリーの夢研究の比較については、すでに次の研究がある。保莉瑞穂『ブルースト・夢の方法』筑摩書房一九九七年・湯沢英彦『ブルースト的冒険——偶然・反復・倒錯』水声社、二〇〇一年。ブルーストとフロイトとの共通点を探る Jean-Yves Tadié, *Le Lac inconnu. Entre Proust et Freud*, Gallimard, 2012 も参照のこと。

4 ヴアレリーの『カイエ』からの引用はファクシミリ版を基本とし、ブレイヤード版に収録されている場合にはそのレフェランスも略号で記す。

— *Cahiers, fac-simile intégral*, C.N.R.S., 29 vol., 1957-1961 (G, I...).

— *Cahiers*, édition établie, présentée et annotée par Judith Robinson, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2 vol., 1973 et 1974 (C1, C2).

5 この意味で、ヴァレリーの夢研究は、ウイトゲンシュタイン（一八九九—一九五二）の考察と比較することができ。この哲学者は、「夢」という言葉でわれわれが一般に何を理解しているのかという問いを検討した。この哲学者が出した

- 結論も、夢は過去形でしか語れない、ということだった。G:  
黒崎宏「ワイトゲンシュタインと夢」、木村尚三郎『夢と人間』、  
東京大学出版会、一九八六年、七七一―九八頁。
- 6 Valéry, G., XXVII, 703の「マッサン」を参照のこと。
- 7 Georges Poulet, *Études sur le temps humain*, t. I, Édition du Rocher, 1952, p. 420.